The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『農耕詩』から『アストロノミカ』へ : マーニーリウスの「矛盾」と詩的伝統
Author(s)	竹下, 哲文
Citation	神話学研究. 2017, 1, p. 29-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『農耕詩』から『アストロノミカ』へ
――マーニーリウスの「矛盾」と詩的伝統――

竹下　哲文

はじめに

紀元 1 世紀のラテン詩人マールクス・マーニーリウスの『アストロノミカ』のうちにはルクレーティウスをはじめとした先行するラテン詩人の詩的イメージや哲学者たちのさまざまな思想・世界観が取り入れられている。いわゆる「教訓詩」という枠組もあり、とりわけルクレーティウスとの対比からマーニーリウスはストア詩人として語られることがあったが[1]、この詩人の持つ知的伝統を整理し、それがストア思想を中心としながらも非常に折衷的な性格を持っていることがこれまでの研究によって明らかになってきた。そのなかでもマーニーリウスを扱ったモノグラフを著した Volk による研究は重要な位置をしめている。

その一方でこの折衷性を強調するあまり、Volk の研究には分析が不充分なまま残されている箇所があるようにも思われる。そのような箇所のひとつとして今取り上げるのが‘Pious and Impious Approaches to Cosmology in Manilius’という 2001 年の論文で示された理解である。この論文で Volk は、詩人が探究の対象である宇宙（＝神）へのアプローチとして相反する二つの立場を混在させていることを指摘し、それを詩人の折衷主義に起因するものと結論付けている。そこで本論文ではまず議論の前提としてこの Volk の研究の概要を確認する（I)。詩人が用いた個別の詩的・思想的なモチーフの背景を探るという Volk の研究は方向性として妥当であり有益なものでもあるが、人間と神の関係に関して『アストロノミカ』とその主要な参照先であるウェルギリウス『農耕詩』との間にある枠組の共通点・相違点が充分に検討されておらず、Volk の指摘したマーニーリウスの「一貫性のなさ」には議論の余地があるように思われる。したがってこの点を再度検討する必要がある（II)。

更にまたこの人間と神の関係という点でとくに注目されるのは『アストロノミカ』第 1 巻冒頭に挿入された文明史の記述である。この部分について『アストロノミカ』と『農耕詩』、さらにはルクレーティウス『事物の本性について』の間の関連性はすでに指摘されているが、それは主として特定の語句やマーニーリウスの模倣手法などに集中していた。Volk の議論とその批判的検討を踏まえたうえで、三者をあらためて比較すれば、詩人の創意やこの挿入部分が作品全体のなかで持つ意味合いも明らかになるであろう（III)。

---

[1] たとえば Cruttwell (1877), 317 は次のように述べている（イタリックは引用者)。Rising above the technicalities of the science, Manilius tries to preach a theory of the universe which shall displace that given by Lucretius. *He is a Stoic combating an Epicurean*. A close study of Lucretius is evidenced by numerous passages, and the earnestness of his moral conclusions imitates, though it does not approach in impressiveness, that of the great Epicurean. また「ストア詩人マーニーリウス」という扱いの略史については MacGregor (2005), 41-46も参照。

I. K. Volk の研究

はじめに議論の出発点として Volk の研究を概観しておく必要があるだろう。

Volk は『アストロノミカ』の中に詩人の神や宇宙に対する態度として異なるふたつの側面があることを指摘し、それを pious/impious という形容詞で表現している。Volk は作中から、宇宙＝神と調和的・友好的な仕方で真理に近づいていくという詩人の敬虔な（pious）態度を読み取る。しかしその一方で、『アストロノミカ』の中には人間の側の姿勢として「暴力的」（violent）ともとれる表現も見られ、こうした不敬虔な（impious）態度は。『アストロノミカ』全体の思想に深刻な影響を与えるほどではないものの、ある種の自己矛盾に陥っていると指摘する。

以下では、この Volk の研究を他の先行研究から補いを入れつつ概観することにする。

I. 1. 詩人の飛翔

まず Volk は、『アストロノミカ』の中に幾度か見られる「天に昇る詩人」という指摘イメージの伝統があることを指摘する。哲学者が思弁の世界で天を飛翔するという描写はパルメニデースにすでに見出すことができ[2]、プラトーンも知を探求する者の思考を、ピンダロスからの引用によって「地の下にも天の外にも」（τᾶς τε γᾶς ὑπένερθε ... οὐρανοῦ θ᾽ ὕπερ）及ぶものであると言う[3]。

詩人の例に目を向けると、オウィディウスは『祭暦』・『変身物語』のなかでそれぞれ、

> felices animae, quibus haec cognoscere primis
> inque domos superas scandere cura fuit! (Ov. *Fast*. 1. 297f.)
> これらのことを知ること、天上の館へ上がることを／はじめてその関心とした幸福な魂よ。

> ... iuvat ire per alta
> astra, iuvat terris et inerti sede relicta
> nube vehi validique umeris insistere Atlantis, (Ov. *Met*. 15. 148f.)
> 高き星々の間を／往くのは喜ばしい。大地と怠惰な座を残し去り／雲に乗って、アトラースの肩に立つことは喜ばしい……

---

[2] Sext. Emp. *Adv. math*. 7. 111. もっともこのパルメニデースの詩句は様々な解釈を許すものであり、此処で詩人が天へ向かっているとするのはそのうちのひとつであることを注記しておく。詳しくは Landolfi (2003), 14 を参照。

[3] Plat. *Theaet*. 173E-174A. また *Apol*. 19C ではアリストパネースの喜劇に描かれるソークラテースは「天を踏んでいく」（οὐρανοβατεῖν）とされている。

と述べている[4]。

また次に引くのはルクレーティウスの詩句だが、ここではエピクーロスの偉業が歌われていて、哲学者が思弁によって宇宙をめぐるというイメージが表されている。

(Graius homo) ... *effringere* ut arta
naturae primus portarum claustra cupiret.
ergo vivida vis animi *pervicit*, et extra
processit longe flammantia moenia mundi
atque omne immensum peragravit mente animoque,
unde refert nobis *victor* ... (Lucr. *DRN* 1. 68-75)

（ギリシア人（＝エピクーロス）は）ぴたりと閉じられた／自然の扉の閂をはじめて打ち開こうとした。／かくして活力ある精神の力が勝利を収め、／宇宙の燃えさかる壁を越え出でて／果てしない宇宙を精神によって巡り歩き、／そこから勝者としてわれわれに語るのだ……

ここでルクレーティウスがある意味攻撃的な言葉づかいによってエピクーロスの「勝利」を強調していることは、次に見るような宇宙と調和的に歌う詩人としてのマーニーリウスの姿とは対照的に見える[5]。

では当の『アストロノミカ』の詩人がどのような表現をしているかを見てみよう。

... iuvat ire per ipsum
aera et immenso spatiantem vivere caelo
signaque et adversos stellarum noscere cusrus.
quod solum novisse parum est. impensius ipsa
scire iuvat magni penitus praecordia mundi,
quaque regat generetque suis animalia signis
cernere et in numerum Phoebo modulante referre (Man. *Astr*. 1. 13-19)

天そのものを通り行くこと、／生きて果てしない大空を巡ること、そして星座と／惑星の逆向きの軌道を知ることは喜びだ。／だがこれを知るだけでは不充分。大いなる宇宙の／核心を知り極めること、それがどのように、／星座を介して生物を生み出し支配するかを知ること、／アポッローンを調律者としてそれらを詩に語ることは一層はげしい喜びだ[6]。

---

[4] とくに後者は後述する Man. *Astr*. 1. 13-19 と表現上対応している点に注意したい。
[5] ルクレーティウスの言葉づかいについては Wilson (1985), 288 も同様の指摘をしている。
[6] 以下、マーニーリウスの翻訳は Goold (1985)に基づく筆者のものである。

と語られる。更に第 2 巻においては、この詩人は大衆のために歌うのではなくひとり車を進めて天へと向かい、その詩に星々が驚嘆し宇宙が喜ぶ（mirantibus astris / et gaudente sui mundo per carmina vatis, 2. 141f.）と述べている。

『事物の本性について』と比較するならば、勝者として天を歩んだ哲学者エピクーロスとそれを歌う詩人ルクレーティウスとに分かれていた役割が、『アストロノミカ』では詩人ひとりのうちに統合されていると言える。そして Landolfi の指摘では、『アストロノミカ』の特徴は、秘儀に与る詩人とその奥義を授かる読者という関係にあり[7]、そのためルクレーティウスとは対照的に、『アストロノミカ』における詩人像は、Volk の言葉を借りるならば、'pious agent of a universe that wishes to reveal itself to mankind' となる[8]。

I. 2. 巨人族の比喩

さて、『アストロノミカ』の詩人は既存の詩人が星座とその神話的起源などを歌ったことに対し、それはさながら地上が天を形作るかのようで転倒した関係にある（terraque composuit mundum quae pendet ab illo 2. 38）という批判を 2 巻のはじめで行っているが、Volk はその 100 行ほどあとの、

> quis neget esse nefas invitum prendere mundum
> et velut in semet captum deducere in orbem? (Man. *Astr*. 2. 127f.)
> 誰が否定しようか、嫌がる天を捉えることが、あたかも／我が物とするごとく捕えて地上へ引きおろすのが無法であることを。

という表現にも同様の批判を読み取り、詩人自身のアプローチと対照をなす impious なそれがどのようなものであるか示しているものと考える[9]。ここで「引きおろす」（deducere）という表現が使われていることに留意しなくてはいけない。この一方で冒頭部分に眼を転じると、

> Carmine divinas artes et conscia fati
> sidera diversos hominum variantia casus,
> caelestis rationis opus, deducere mundo
> aggredior ... (Man. *Astr*. 1. 1-4)
> 詩によって、神聖なる術を、また運命に関わり／人間の様々な巡りあわせを変転させ

---

[7] Landolfi (2003), 28. ところで『アストロノミカ』の中で教えを受ける読者としてどのような人が想定されるかという問題があるが、これは本稿の議論に直接には関係しないため、取り扱わない。これについては Volk (2002), 202-208 の議論を参照。

[8] Volk (2001), 91.

[9] Cf. Volk (2001), 96. また 2. 127f.の 2 行について Volk は、mundum を caelum「天」の意味にとり、in semet の se を対格として、orbem を「地上世界」のこととして理解する提案をしている。他の解釈も含めた詳しい議論は Volk (2001), 92-94 を参照。

る星々を――／すなわち天の理法の作品を――天空から引き下ろすことに／私は着手する。

という具合に、そもそもこの詩の企てが「天から星々を引き下ろす」ことであった。Volk によると、この「天から引き下ろす」という表現には哲学的な議論における「巨人族の戦い」の比喩の伝統があるという。たとえばプラトーンの『ソピステース』246A では、形相主義者に対して物体主義者が「あらゆるものを目に見えない天上の世界から地上へと引きずりおろす」（εἰς γῆν ἐξ οὐρανοῦ καὶ τῶν ἀοράτων πάντα ἕλκουσι）と言われている[10]。これに類似した表現はアリストテレース『哲学について』（*De Philosophia*）の中でも世界の永遠性を否定する論者に対して用いられ、ルクレーティウスでも――ただしアリストテレースとは反転させて――世界の永遠性を否定する自身の説に対して、神々に反抗した巨人族のような不敬さを感じないように忠告をするという文脈で用いられている[11]。

こうした一連の流れを踏まえて、マーニーリウスは自らの企てを上述のように表現したのであったが、このほかにも Volk が闘争的・攻撃的な調子を認めている箇所として、第 1 巻からは「（祭司たちは）献身により神を縛った」（officio *vinxere* deum 1. 48）、「（経験は）隠れた法により支配する星々を捕らえた」（*deprendit* tacitis dominantia legibus astra 1. 63）、「（人間の）理性は天へと上る」（caelum *ascendit* ratio 1. 97）、「ユッピテルから稲妻と雷鳴の力を奪った」（*eripuitque* Iovi fulmen viresque tonandi 1. 104）といった表現を、また第 4 巻からは「貴方が努めるのは天へと上ること」（conaris *scandere* caelum 4. 390）、「宇宙を我が物とする」（mundoque *potiri* 4. 392）、「我々は天を捕らえて支配する」（*capto potimur* mundo 4. 884）といった表現が取り上げられる。そして 4 巻において人間の卓越性を語る箇所では、

... secessit in urbes,
edomuit terram ad fruges, animalia *cepit*
imposuitque viam ponto, stetit unus in arcem
erectus capitis *victorque* ad sidera mittit
sidereos oculos propiusque aspectat Olympum
inquiritque Iovem; (Man. *Astr*. 4. 903-908)

……都市へと篭り／実りをつけるよう大地を手懐け、生物を捕らえ、／海には道を拓いた。ひとり人間のみが頭を上に／直立し、勝者として星々へと星の如き眼を
差向け、天空を一層間近に眺め、／ユッピテルを探究する……

[10] 実はここにはすでに複数のイメージの混淆がある。天へ攻撃をかけることは巨人族の姿として普通であるが、「天から引き下ろす」のは、ホメーロス（*Il*. 8. 18-27）におけるゼウスと神々の黄金の鎖による力比べに由来するであろうと Reiche (1971), 297 は指摘している。

[11] これらの神話の取り扱われ方は Reiche (1971), 314 に簡潔に図表化されている。

とも述べられる[12]。このような表現はたしかに先に見た 2. 127f.の表現とは齟齬を生じているように見える。つまりマーニーリウスが斥けたはずのアプローチと詩人自身の試み自体が同じであるように見えてくるのである。こうしたことに対して Volk の与えた結論は、詩人は一貫性のある像を作り上げるというよりもさまざまなイメージを最大限効果的に用いることを優先した、というものであった。

> Manilius, the post-classical latecomer, finds himself heir to a vast store of literary images, and I would suggest that in drawing on this repertory, the poet is more interested in using each image to its utmost effect than in presenting an absolutely consistent picture.[13]

II. 『農耕詩』と『アストロノミカ』

なるほど Volk の分析は説得的である。その指摘のとおり、『アストロノミカ』の背景には多種の詩的・思想的伝統があることは間違いない。しかしここで取りあげられた箇所で焦点が当てられているのは人間と神との関係である。ストア的な汎神論の考え方が神と自然を実質的に等しいものとして捉えるものならば、こうした人間と神・自然との関係は、『アストロノミカ』に先立つウェルギリウス『農耕詩』にも見出すことができる。『農耕詩』第 1 巻には「農耕を介しての自然と人の関係」や「人間に強いられる労働（労苦）の起源と神の意志」が重要な主題として現れるのである。また『アストロノミカ』第 1 巻の冒頭部にも人類の文明の発展過程を描いた詩行が挿入されており（1. 66-112）、そこには Volk が問題として取り上げていた詩句の多くが含まれている。したがって、この両作品についての比較検討は有意義なものであるだろう。

II. 1. 「自然」（natura）の捉え方

まず、『農耕詩』と『アストロノミカ』という両作品における自然の捉え方の共通性を確認しておこう。「自然と人間」といっても、一方は農耕であり他方は様々な技術による自然の征服であり、にわかには比較の妥当性を感じづらいかもしれない。ここで両作品において自然がどうとらえられているかを簡単に見ておく。いずれにおいても実は「自然」を「神」に等しい概念として用いている点が共通している。

まずウェルギリウスについてみるとその宇宙観にはストア派の語彙や発想のあることが指摘されている[14]。『農耕詩』において大洪水とデウカリオーンによる人間の創造の後、

> has leges aeternaque foedera certis

---

[12] これらは Volk (2009), 257f.にまとめられている。
[13] Volk (2001), 113. Volk はその後も同様の立場を保持している。Volk (2009), 258 を参照。
[14] Cf. Lapidge (1989), 1390-1392.

imposuit natura locis ... (Verg. *Georg*. 1. 60f.)
自然はこれらの法と永遠の掟を／決まった場所に定め置いた……

と言われている箇所では「自然」（natura）はほとんど「神」に等しく使われているようである。また、1 巻後半の予兆に関する部分でも、ユッピテル自身が大気の湿度を変化させ（Iuppiter uvidus）動物の心の形・在り様（species animorum）を変化させる存在とされていて、自然界の万物に浸透する存在として神が理解されていると考えられる[15]。

マーニーリウスに関しては、宇宙の諸部分に「神的な霊気の力」（vis animae divina）が満ちているという汎神論的な考えが示されており[16]、「自然」（natura）という語の用法に着目しても、「宇宙の生みの親たる自然」（illa parens mundi natura 2. 209）、「隠された事物の始原にして監察者たる自然」（principium rerum et custos natura latentum 3. 47）、「天にある自然の作りなす国家」（quaedam res publica mundo est / quam natura facit 5. 739）といった表現には natura = deus という関係を読み取ることができると思われる[17]。そしてこのような両者に共通の自然観からは、人と自然との間に対立・緊張関係が生じてくることになる。

II. 2. 神の意志・恩恵

以上を踏まえて分析に入っていこう。まずウェルギリウスにおいては、農耕は神々から贈られた賜物と捉えられている。

Liber et alma Ceres, *vestro* si *munere* tellus
Chaoniam pingui glandem mutavit arista,
poculaque inventis Acheloia miscuit uvis; (Verg. *Georg*. 1. 7-9)
リーベルと恵み深きケレースよ、あなた方の恩恵により／大地はカーオニアの団栗を豊かな麦穂に変え、／見出された葡萄にアケロオスの水を混ぜたのだ。

そして労働がなくとも満ち足りていた黄金時代に終止符を打ち、人間たちを厳しい耕作の道へと向けさせたのは他ならぬユッピテル自身であった。

... pater ipse colendi / haud facilem esse viam *voluit*, (Verg. *Georg*. 121f.)
父なる神自身が耕作の道の容易ならざることを望んだ。

また 4 巻では養蜂の技術の起源としてアリスタエウスの物語が述べられるその導入に、

---

[15] 『牧歌』第 3 歌ではユッピテルが万物に満ち（Iovis omnia plena）大地を養うとされる（Verg. *Ecl*. 3. 60f.）。『農耕詩』における神の姿についてのより詳しい分析は小川 (1994), 372-380 を参照。
[16] Cf. Man. *Astr*. 1. 247-254.
[17] その他こうした natura の用例については Real Francia (1998), s. v. 2 を参照。

Quis deus hanc, Musae, quis nobis extudit artem?
unde nova ingressus hominum experientia cepit? (Verg. *Georg*. 4. 315f.)
ムーサらよ、どの神がこの技術を我々に生み出してくれたか。／何処から人間たちは新しくこの技を習得する契機を得たか。

とあることも注意してよいだろう。

他方マーニーリウスにおいても、天の秘密を知ることができるのは神々の恩恵によるものであり、「自然」はすすんで自らを開示したとされている。

Quem (= mundum) *primum* interius licuit cognoscere terris
munere caelestum. (Man. *Astr*. 1. 25f.)
この宇宙を一層深く知ることがはじめて地上に許されたのは／神々の恩恵による。

et natura dedit vires *seque ipsa reclusit*
regalis animos primum dignata movere (Man. *Astr*. 1. 40f.)
そして自然は力を授け、己自身を開示した、／最初に王たちの心を畏くも動かして。

いずれにおいても主題となる技術が神にその起源を持っていることが共通している。

II. 3. 競争とそれによる発展

ではウェルギリウスにおいて農耕のもととなる労働の起源はどう描かれているだろうか。『農耕詩』では黄金時代の人々のありようはさながらまどろんでいるかのように描かれ、それを神が労苦によって研ぎ澄まし、自身の王国から怠惰を追い払ったとされる。

... pater ipse colendi
haud facilem esse viam voluit, primusque per artem
movit agros, curis *acuens mortalia corda*
nec torpere gravi passus sua regna veterno. (Verg. *Georg*. 1. 121-124)
父自らが／耕作の道の容易ならざることを望んだ、そして初めて技術により／土地を耕し、また気苦労で人の心を研ぎ澄まして／自らの王国が重たい無気力でまどろむのを許さなかった。

この描写については、ヘーシオドスの『仕事と日』に遡ることができる。ヘーシオドスでは原初には「争い」（エリス）には善いものと悪い（厄介な）ものとの二種があり、善き争いをゼウスが地の根元に据え、それが人々を労働へと駆り立てるとされていた。

θῆκε δέ μιν Κρονίδης ὑψίζυγος, αἰθέρι ναίων,
γαίης [τ’] ἐν ῥίζῃσι καὶ ἀνδράσι πολλὸν ἀμείνω·
ἥ τε καὶ ἀπάλαμόν περ ὁμῶς ἐπὶ ἔργον ἐγείρει· (Hes. *Op*. 17-19)
天空に住まい、高き座にあるクロノスの子が彼女（エリス）を／大地の根に据え、人間にとってさらに一層よきものとした。／彼女は無精者さえ労働へと目覚めさせるのだ。

そして人々は互いに競争心を持つようになる。

καὶ κεραμεὺς κεραμεῖ κοτέει καὶ τέκτονι τέκτων,
καὶ πτωχὸς πτωχῷ φθονέει καὶ ἀοιδὸς ἀοιδῷ. (Hes. *Op*. 25f.)
陶工は陶工に対し、大工は大工に対して張り合い、／物乞いは物乞いに対し、歌い手は歌い手に対して妬みを抱く。

『アストロノミカ』でもこうした「労働への目覚め」や「競い合い」は引き継がれている。

sed cum longa dies *acuit mortalia corda*
et labor ingenium miseris dedit et sua quemque
advigilare sibi iussit fortuna premendo,
seducta in varias *certarunt* pectora curas (Man. *Astr*. 1. 79-82)
だが長い月日が死すべき人の心を研ぎ澄まし、／哀れな彼らに労苦が才能を授け、運命は圧をかけて／めいめいが自身に目覚めるように命じ、／彼らは様々な仕事へ分かれ競い合った。

もちろんこの時点ではこうした「争い」は人間同士の間での競い合いであり、自然に対して向けられたものではない。しかし、ここで人間に働きかける「労苦」（labor）が、そこから技術が発展していくための原動力としての機能をもつという点は共通していると言えるだろう[18]。

II. 4. 自然との闘い

そしてまた『農耕詩』では、ウェルギリウスは自然を相手とする「戦い」として農耕を描いている。その語彙の特徴的なことはすでに指摘されている。

[18] ここでの labor がウェルギリウス『農耕詩』における labor improbus を、Altevogt の解釈と同様の意味でマーニーリウスが理解しているという指摘が Effe (1971), 397f.によってなされている。Altevogt は、labor improbus から「不屈の労働」として肯定的な意味のみを読み取るのは一連の文脈の中でも、improbus の意味的にも不適切であることを指摘した。また絶えざる刻苦が求められることについては、『農耕詩』における川を遡る舟の喩え（Verg. *Georg*. 1. 199-203）も参照。

exercetque frequens tellurem atque *imperat* arvis. (Verg. *Georg*. 1. 99)
幾度も大地を鍛え、土地に権力を振るう。

quid dicam, iacto qui semine *comminus* arva
insequitur cumulosque *ruit* male pinguis harenae ... (Verg. *Georg*. 1. 104f.)[19]
何故敢えて語ろうか、種を撒いた後腕を交えて土地を／追撃し、やせた砂地の畝山を崩す者を……

先に Volk が取りあげていた『アストロノミカ』の詩句を思い返してみよう。第 1 巻では、献身により神を捕縛した（officio vinxere deum）祭司たち、経験を通して星々をとらえたこと（deprendit dominantia astra）、雷の原因を理解することでそれをユッピテルから奪い取った（eripuitque Iovi fulmen ...）ことが語られ、そして 4 巻においては大地を手懐け、生物を捕えるなど勝者（victor）としての人間の卓越性が強調されていたのであった。はじめに確認したウェルギリウス、マーニーリウスそれぞれにおける「自然」の扱われ方、次いで検討した「神の意志・恩恵に発する技術」・「争いによる発展」を踏まえ、この両者の「自然との闘い」を比べてみるとどうであろうか。そこに認められるのは、神の支配あるいは自然の法が万物に行きわたるとする一方で、その神に起源をもつ労苦と技術により人間が闘争的に発展していくというウェルギリウスとマーニーリウスとに共通の枠組である。したがって本稿 I で確認したような Volk の結論は再考の必要があるように思われる。

III. 文明史観

III. 1. ルクレーティウス、ウェルギリウスとの共通点・相違点

以上では Volk が取りあげた問題に関して批判的な検討を行い、『アストロノミカ』と『農耕詩』の関わりについて見た。ところでこれまで取りあげてきた詩句の多くが第 1 巻冒頭部分に現れていたことは注意すべき点である。この箇所は『アストロノミカ』の序歌の中にさしはさまれた文明史の叙述であり、この文明史についてもう少し踏み込んでみるとしよう。技術の発展や人間の進歩といった主題はジャンルを問わずさまざまな作品の中に見出されるが[20]、ここでマーニーリウスが参照している作品としてウェルギリウスの『農耕詩』についで特に注目すべきはルクレーティウス『事物の本性について』第 5 巻後半で描かれるそれである。

もちろんこれらの作品の比較検討については先行研究がある。とりわけ『農耕詩』と『アストロノミカ』に関しては *Georgica* と *Astronomica* という作品名の類似がすでに両者の関

[19] その他の例は Thomas (1988), 98 を参照。
[20] そうした例については Dickie (2002), 449 n. 2 を参照。

係を感じさせるものであり、これらの作品について現在の議論とも関連する比較的新しい研究としてはまず Effe によるものがあるが[21]、これはウェルギリウスの labor improbus について Altevogt が決定的な研究をしたにもかかわらず議論があることを踏まえ、見過ごされている『アストロノミカ』での模倣箇所を解釈することを通してこれを補強しようとするものであり、その議論は比較的短いものである。一方 Di Giovine の研究についてみると[22]、これは、マーニーリウスとルクレーティウスの関わりを扱った Rösch の研究がルクレーティウス以外の詩人からの影響を充分に考慮していないとして、マーニーリウスの詩的模倣の技術を特に 1 巻冒頭部分について検討する論文である[23]。またそれに続いて発表された Romano の研究は、マーニーリウスの文明史がもつ進歩的傾向という特徴に注目してその思想的な出自を調べるものであり[24]、Flammini の研究も同様の着眼点から「知恵、叡智」（sollertia）の概念を主に取り上げるというものである[25]。したがって、こうした先行研究を踏まえたうえで、今問題となっている人間と神との関係という視点からこれらの作品の比較対照をあらためて行うことは無意味ではないだろう。これらの間にどのような共通点・相違点があるかを見ることで、『アストロノミカ』が『農耕詩』の枠組を継承しつつそこにどのような変化を加えたかが明らかになるはずである。

上記三作品について、先行研究が関連性を指摘した箇所を含め現在の議論上重要と思われるものを表にまとめると以下のようになる。

文明以前の人々の姿

Lucretius *De Rerum Natura*	Vergilius *Georgica*	Manilius *Astronomica*
耕作者の不在・豊かな大地・自然の与えてくれるものに満足する人々（5. 933-961）	ユッピテル以前の耕作者の不在（1. 125）・豊かで気前のよい大地（tellus / omnia liberius ... ferebat 1. 127f.）	粗野な人々の下にとどまる大地（terraque sub rudibus cessabat ... colonis 1. 73f.）
「共有財」（commune bonum）を持たない原始人（5. 958-961）	土地を区切らず、共有する人々（in medium quaerebant 1. 127）	
原始人は、太陽が沈んだからといって嘆いたりはしなかった（5. 973-981）		世界に対する理解の欠如・星の昇り沈みに一喜一憂（1. 67-69）

[21] Effe (1971).
[22] Di Giovine (1978).
[23] Rösch の研究は Rösch (1911)。ただしこの文献は今回直接参照できなかった。
[24] Romano (1979).
[25] Flammini (1993).

黄金時代の喪失

Lucretius *De Rerum Natura*	Vergilius *Georgica*	Manilius *Astronomica*
野獣の恐怖（982 - 992）	毒蛇、狼の掠奪（1. 129f.）	
航海という悪しき考え（improba navigii ratio）は知られずにいた（5. 1006）	波立たせられた海（pontumque moveri 1. 130）	世界を隔てる海（immotusque novos pontus subduxerat orbes 1. 76）・航海の企ての不在・狭い世界に満足した人々（1. 77f.）

進歩に伴う変化

Lucretius *De Rerum Natura*	Vergilius *Georgica*	Manilius *Astronomica*
火の発見（5. 1091-1104）	奪われていた火（1. 131）の発見（1. 135）	
航海術の発明（5. 1448）	航海術の発明（1. 136）	航海による未知の世界の開拓（1. 87f.）
技術（狩猟・鉄器・天測）の獲得（5. 1241-1457）	技術（狩猟・鉄器・天測）の獲得（1. 136-144）	経験がもたらす発明を喜んで「共有財」（commune bonum）へと委ねる（1. 83f.）
経験を通して徐々に（paulatim）獲得されていく技術（5. 1452f.）	経験が様々な技術を徐々に（paulatim）生み出す（1. 133f.）	経験がある技術から別な技術を派生させていく（1. 90）
	悪しき労苦と欠乏の勝利（labor omnia vicit / improbus et ... egestas 1. 145f.）	聡明なる叡智の勝利（omnia conando docilis sollertia vicit 1. 95）

このようにしてみると、それぞれの違いが見えてくるだろう。ルクレーティウスの比較的長い文明史は、原始世界における人間の生き方から始まり、段階的に技術を獲得して文明の発展していく様を描いている。そこには確かに段階的進歩というものが認められはするが、自然の与えるものに満足していた原始世界の人々とは対照的に、火の発明以後あくなき欲望に捕らわれた文明社会の否定的側面にも光が当てられている。原始世界には獣におそわれて命を落とす恐れなどの悲惨さがあったが、それでも死者は航海や戦争によるほどに多くはなかったのである（5. 999-1001）。ルクレーティウスの描く文明史は、技術的進歩という面を持ちつつもむしろその進歩のゆえに精神的には下降していくペシミスティックなものであったと言うことができるだろう[26]。

[26] ルクレーティウス、ウェルギリウス間のより詳細な比較は小川 (1994), 364ff.を参照。そこでは次の

他方、ウェルギリウスの場合、黄金時代という理想郷の喪失は明確であり、ユッピテルによって人間に労苦が課されたとされていることから、全体は悲観的な調子を持っている。しかしながら、その労苦を通して作物という恵みを得ることができるのであり、農夫の生活はときに黄金時代のそれに比べられもする[27]。喜ばしからざる「悪しき労苦」（labor improbus）が[28]、しかし人間に恵みをもたらしてくれる存在であり、全てに勝利をおさめたという句にその正と負の両面性がよく現れていると言える。

これに対してマーニーリウスはというと、原始時代を理想的な黄金時代としてではなく無知蒙昧の世界として描き、また星の昇り降りについて原始人が抱いた感想についてもルクレーティウスの説くところを反転させている、そして技術の進歩がもつ負の側面にはほとんど言及していない。ウェルギリウスの labor improbus が持っていた否定的側面を引き継ぎつつも[29]、その「労苦と欠乏の勝利」は人類の「叡智の勝利」として肯定的な色合いを強くもつ表現に置き換えられている。ウェルギリウスにおいては解釈の分かれる悲観主義と楽観主義の併存という点については、マーニーリウスは楽観主義への傾斜を示していることがわかるだろう[30]。

III. 2. 文明史の作品全体におけるはたらき

こうしたマーニーリウスの進歩的・楽観的な文明史の性格はどのような意味を持つのであろうか。まず作品の書かれた時代状況という点で見ると、アウグストゥスの治世下でこの詩人は作品を彼に捧げており、共和制末期の混乱や内乱の時代を経験したルクレーティウスやウェルギリウスとは世代を異にしている（そしてこの点ではむしろオウィディウスに近いといえる）。時代の苦境のなかで歴史の進歩に対して懐疑的な、あるいは悲観的な見方を持ったルクレーティウスやウェルギリウスに対し、アウグストゥスの平和の下でこそ詩作ができる（hoc sub pace vacat tantum Man. *Astr*. 1. 13）と言うマーニーリウスが、時代を肯定的な態度で捉えていることは納得のできることである。

その一方で、作品内部での機能という点にも注目してみる必要がある。従来この箇所は比較的長い挿入部として扱われ、序歌の研究としては取りあげられ方に差がある[31]。しかし

ように両者の特徴がまとめられている。「ルクレーティウスは、オプティミスティックな社会進化論的見方を語りながら、エピクーロス哲学と原子論に由来するペシミスティックな文明史観をつけ加えることを忘れなかった。それに対しウェルギリウスでは、人間の歴史は黄金時代から鉄の時代に下るというペシミスティックな伝統的下降史観の中に、進歩主義的でオプティミスティックな上昇史観を組み込んでいる」（小川(1994), 367）。

[27] Verg. *Georg*. 2. 532-540.

[28] labor improbus の解釈については Altevogt 1952 に従った。またルクレーティウス、ウェルギリウス両者の文明史観については小川 (1994), 361-368 を参照。

[29] Cf. Effe (1971), 397f.

[30] こうした楽観主義的要素については Effe (1971), 395 や Flammini (1993), 186f.による指摘がある。

[31] 実際、先述した Effe や Di Giovine らが模倣技法の点でこの箇所に注目した一方、序歌を論じた Schrijvers (1983)が取り上げるのは第 1 巻の最初から 24 行目までのみであり、Wilson (1985)は序歌の

直前直後という序歌の枠組だけでなく作品全体（とりわけ第 4 巻）との関連性に目を向けると、それが持つ意義が見えてくる。すなわち、『アストロノミカ』の中で進められていく詩人と読者の知的探究が、この文明史の流れと重なり合っているのである。

まず、『アストロノミカ』という作品はいわゆる「教訓詩」として教師役の詩人が読者に教えを授けていく形で展開していく。そうした知識の展開がただの無作為な羅列ではなく段階的な計画にしたがい行われていることは第 2 巻に現れるふたつの喩えからも明らかである（2. 750-787）。そこでは詩人の方法が、部分から全体へと徐々に進んでいき、ちょうど子どもが読み書きを学んだり、都市が建設されていったりする様と同じようなものであるとされている。

> ut rudibus pueris monstratur littera primum
> per faciem nomenque suum, tum ponitur usus,
> tum coniuncta suis formatur syllaba nodis,
> hinc verbi structura venit per membra legendi,
> tunc rerum vires atque artis traditur usus
> perque pedes proprios nascentia carmina surgunt,
> ...
> sic mihi ...
> ...
> per partes ducenda fides et singula rerum
> sunt gradibus tradenda suis, (Man. *Astr*. 2. 755 - 770)
>
> ちょうど物を知らない子どもには文字がまず／その形と名前で示され、続いてその価値が説かれる。／次にはそれらの結びつきにより音節が形作られ、／ここから部分部分によって語を読む仕組みが生じ、／そこで事物のはたらき（＝意味）と技術（＝文法）の実践が伝えられ／自身の脚（＝詩脚）で詩が生まれ出でて立ち上がる、／……／そのように私は……／……／部分ごとに確信を得て、事柄のひとつひとつを／しかるべき段階に配さなくてはならない[32]。

こうした進展の仕方は技術から技術が次々と生み出され文明が進歩していくその段階性と呼応している。

> semper enim ex aliis alias (sc. artes) proseminat usus. (Man. *Astr*. 1. 90)
>
> 経験はいつもある技術から別の技術を派生させていく[33]。

内容に応じた区切りを設けることこそ行っているものの、その主な分析はやはり前半に限られている。また Dickie (2002)の議論の焦点は 91-94 行の真正性に向けられている。

[32] これに続いてさらに都市を建設する手順による喩えも語られる（4. 772-783）。

[33] こうした技術の段階的発展はルクレーティウス、ウェルギリウスからも受け継いでいるものであ

そして詩人の読者に対する語りかけとして注目されるのは、第 4 巻で二度にわたり示される励ましの言葉である[34]。そのひとつ目では題材の難しさに挫けかける読者に向けて、自分たちの探究対象は神であり、努力を怠ればそれに到達することはできないということが比喩を持って語られている。

> at nisi perfossis fugiet te montibus aurum,
> obstabitque suis opibus super addita tellus. (Man. *Astr*. 4. 396f.)
> だが山々を掘削せねば黄金は貴方から逃げていき、／上に覆いかぶさる大地がその富を阻んでしまうだろう[35]。

探究が耐えざる努力と刻苦によって実現されること、それによって得られるべきものが黄金に喩えられることは、第 1 巻において描かれたような、労苦によって才能を開花させ、運命に圧されて競いながら繁栄していく人間たちの姿、そして文明以前には埋もれたままであった黄金（tumque in desertis habitabat montibus aurum 1. 75）と対応している。

このようにして展開していく第 4 巻はその末尾において、いわば作品全体のクライマックスを形作ってもいる。たしかに『アストロノミカ』自体は 5 巻からなっているものの、第 4 巻では作品全体の探究対象が明かされ（4. 390-392）、人間である我々が天の認識へと至る様が描かれている[36]。その一方で第 5 巻は内容的にパラナテッロンタ（すなわち各宮とともに昇る星座とその影響）を扱うことで徹底しており、この巻の冒頭でもマーニーリウス自身が、凡庸な詩人であれば此処で詩作を止めたことであろうと述べている（5. 1-7）。これらの点から詩人と読者による知的探究の頂点は第 4 巻にあると認めることができるだろう。

そしてこのクライマックスにおいて人間の卓越性が強調され、その理性が全てに勝利すると言われる（ratio omnia vincit, 4. 932）。これは第 1 巻での人間の叡智の勝利（sollertia vicit 1. 95）と明らかに対応しており、「勝利する」という動詞の時制の違いが効果的な対照をなしている。すなわち、文明史上の過去の出来事としての勝利と、詩人と読者の間でいわば同時的に進行してきた探究のなかで得られた勝利とが対比される[37]。その一方でちょうど文明の始まりが神に発していたように、詩人と読者の知的探究それ自体もまた運命の法の下にあることは一度ならず述べられているのである。

> hoc quoque fatorum est, legem perdiscere fati. (Man. *Astr*. 2. 149)

る。usus et impigrae simul experientia mentis / *paulatim* docuit *pedetemptim* progredientis. (Lucr. *DRN* 5. 1452f.); ut varias usus meditando extunderet artis / *paulatim* (Verg. *Georg*. 1. 133f.).

[34] Man. *Astr*. 4. 387-407, 866-935.

[35] ほかに叡智を黄金などでもって喩えることは 4. 924-926 にも見られる。

[36] iam nusquam natura latet; pervidimus omnem / et capto potimur mundo nostrumque parentem / pars sua perspicimus ... (Man. *Astr*. 4. 883-885).

[37] この対比については Feraboli, Flores & Scarcia (2001), 433 も参照。

運命の法を学び知ること、これもまた運命に属すのだ。

conaris ... / fataque fatali genitus cognoscere lege (Man. *Astr*. 4. 390f.)
あなたが運命の法より生まれた身として運命を知ろうと努める。

このようにして見ると、第 1 巻に挿入された、一見前後とのつながりの薄いように見える文明史の叙述は、作品全体を通して詩人と読者の間で展開されていく知的探究をいわば先取りするような機能を持っていると考えることができるだろう。

おわりに

マーニーリウスの自身の試みに対する態度がどのように表現されているかに着目し、そこに一見相反するように見える要素を看取した Volk の指摘はそれ自体としては有益なものであった。しかし、それは詩人の折衷主義に起因する一貫性のなさとして考えるべきものではなかった。そこで本論文ではまず神と人間との関係、自然の捉え方についてウェルギリウスとの間のかかわりを検討した。それに加えて、この観点上重要な文明史観についてもルクレーティウス、ウェルギリウスとの比較を通じ、その共通点・相違点を確認し、また『アストロノミカ』第 1 巻冒頭に置かれたこの文明史が作品全体の知的探究の予示という機能を持っていたことを明らかにした。Volk は、こうした「自己矛盾」（self-contradiction）によってマーニーリウスは思想家としては印象の低いものになるとしても、詩的伝統の独自な活用により効果的な詩を作り上げたと述べたが[38]、むしろこうした「自己矛盾」のようにすらうつる自然と人間との緊張関係自体が詩的伝統の継承によるものであり、詩人としてのマーニーリウスの技術の一端を示すものであると考えることができるだろう。

参考文献（雑誌の略号は *L'Année philologique* に従った。）

Altevogt, H., *Labor improbus: eine Vergilstudie*, Münster Westfalen: Aschendorff, 1952.

Cruttwell, C. T., *A History of Roman Literature: from the Earliest Period to the Death of Marcus Aurelius*, New York: Charles Scribner's Sons, 1877.

Dickie, M. W., 'Manilius, *Astronomica* 1. 91-94', *Hermes* 130: 449-466, 2002.

Di Giovine, C., 'Note sulla tecnica imitativa di Manilio', *RFIC* 106: 398-406, 1978.

Effe, B., 'Labor improbus. Ein Grundgedanke der *Georgica* in der Sicht des Manilius', *Gymnasium* 78: 393-399, 1971.

Feraboli, S., Flores, E., & Scarcia, R., *Manilio: Il poema degli astri*, 2 voll., Milano: Mondadori,

[38] '... if his occasional self-contradictions make him less impressive as a thinker, I would still maintain that his learned and original use of the poetic tradition has created some powerful poetry.' (Volk (2001), 114).

1996-2001.

Flammini, G., ‘Manilio e la “sollertia” nella storia delle acquisizioni tecnico-scientifiche: *Astron*. 1, Praef. 66-95’, in Liuzzi (ed.): 185-194, 1993.

Goold, G. P., *Manilius: Astronomica*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press (Loeb Classical Library), 1977 (1992[2]).

——, *M. Manilii Astronomica*, Leipzig: Teubner (Bibliotheca Teubneriana), 1985 (1998[2]).

Haase, W., & Temporini, H. (eds.), *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt: Geschichte und Kultur Roms im Spiegel der neueren Forschung*, Berlin: Walter de Gruyter, 1972 -

Landolfi, L., *Integra prata: Manilio, i proemi*, Bologna: Pàtron, 2003.

Lapidge, M., ‘Stoic Cosmology and Roman Literature, First to Third Centuries A. D.’, in Haase & Temporini (eds.), 2. 36. 3: 1379-1429, 1989.

Liuzzi, D., *M. Manilio Astronomica*, 5 voll., Galatina: Congedo, 1991-1997.

—— (ed.), *Manilio fra poesia e scienza*, Galatina: Congedo, 1993.

MacGregor, A. P., ‘Was Manilius Really a Stoic?’, *ICS* 30: 41-65, 2005.

Real Francia, P. J. del, *Lexicon Manilianum*, Hildesheim: Olms-Weidmann, 1998.

Reiche, H., ‘Myth and Magic in Cosmological Polemics: Plato, Aristotle, Lucretius’, *RhM* 114: 296-329, 1971.

Romano, E., ‘Teoria del progresso ed età dell’oro in Manilio (1, 66-112)’, *RFIC* 107: 394-408, 1979.

Rösch, H., *Manilius und Lucrez*, Kiel: Fiencke, 1911.

Schrijvers, P. H., ‘Le Chant du monde: Remarques sur *Astronomica* I 1-24 de Manilius’, *Mnemosyne* 36: 143-150, 1983.

Thomas, R. F., *Virgil: Georgics*, vol. 1, Cambridge: Cambridge University Press, 1988.

Volk, K., ‘Pious and Impious Approaches to Cosmology in Manilius’, *MD* 47: 85-117, 2001.

——, *The Poetics of Latin Didactic: Lucretius, Vergil, Ovid, Manilius*, Oxford: Oxford University Press, 2002.

——, *Manilius and his Intellectual Background*, Oxford: Oxford University Press, 2009.

Wilson, A. M., ‘The Prologue to Manilius I’, in *Papers of the Liverpool Latin Seminar*, 5: 283-298, 1985.

有田忠郎（訳）『マルクス・マニリウス　占星術または天の聖なる学』白水社, 1978.

小川正廣『ウェルギリウス研究——ローマ詩人の創造』京都大学学術出版会, 1994.

（京都大学）